

追記として、古代の鉄生産に関わると思われる遺構や鉄製品、鉄滓が、少数は得られいるものの、何れも一端を示唆するにとどまる資料と言える。本遺跡の東側に位置する沢田Ⅱ遺跡からは、古代の製鉄遺構が検出されている。そして、地元の方の話しによると、近隣の関口川やその近辺の山などからは羽口が相当数拾える場所があるらしい。本遺跡の未調査部分や周辺地域には、鉄に関わる施設が存在する可能性は極めて高いと思われる。

2. 縄文時代中期中葉～後葉についての若干の考察

上述してきたとおり、沢田Ⅰ遺跡は、縄文時代前期前葉、中期中葉～後葉、奈良時代、平安時代と大きくは4時期に隆盛したことがわかる。検討課題は山積みではあるが、検出された豊富な住居跡は貴重な資料となり得えよう。本節では、それらの時代の中から、出土土器が比較的得られている縄文時代中期について取り挙げてみたい。

(1) 沢田Ⅰ遺跡の中期の様相について

沢田Ⅰ遺跡における縄文時代中期中葉～後葉は、50棟の該期住居跡が検出されているものの、全般に出土遺物が少なく、捨て場と思われる空間の発見がなかった。北上川中流域の該期の遺跡と比較して、出土遺物が少ない傾向が窺われ、本遺跡の特徴なのか若しくはこの周辺の沿岸地域的傾向なものか課題を提供すると思われる。

また、房の沢Ⅳ遺跡発掘調査報告書中でも若干取り上げたが、沢田Ⅰ遺跡の西に隣接する山の尾根上に所在する房の沢Ⅳ遺跡（本遺跡の集落域との比高は約30mを測る）や東側に所在する沢田Ⅱ遺跡からも、該期の住居跡が検出されている状況も非常に興味深い。中期の人々の活動範囲の広さを物語るだけでなく、様々な事象を推定させるものである。

今回の第5次調査の遺構配置図を、佐々木清文が第1～4次調査報告書中で作成したものに合成して示したのが、第58図である。1節で上述したとおり、房の沢Ⅳ遺跡の立地する西側の山の裾全域にわたって50棟（その内第5次調査分8棟）の住居跡が分布するが、捨て場、墓域、土坑域などは不明と言える状況である。

今回行われた沢田Ⅰ遺跡第5次調査からは、堅穴住居跡を廃棄場として転用された可能性がある住居跡が検出され、当初は本遺跡の遺物廃棄の一端が窺える資料と判断された。ただし、土器の接合状況から遺物だけを投棄したのではなく、土器を包含する土毎捨てられている可能性が高いことがわかった。よって、新たな遺構構築時の排土を、廃絶された住居跡に投げ入れるなどの行為があったことを推定する資料と捉えられる。よって、遺物廃棄の解明には至らない。上記の空間が調査地以外にあるものか、若しくは存在しないのか、そして仮に後者であるならば、なんらかの事象がそこに存在するものと思われる。

(2) 土器の出土状況について

第5次調査は調査面積480m²であるが、約10箱分程の中期土器が出土した。面積に対する出土土器の割合としては、過去の調査の中では最も高い出土割合である。比較的多くの出土土器を得られた堅穴住居跡として、m98住居跡1号、o98住居跡1号、r99住居跡1号が挙げられる。3棟共に細分の難しい黒色～黒褐色土を埋土とすることから、明確な土層堆積要因は把握できなかったが、何れの住居跡も住居機能時の家財道具ではなく、廃絶後に埋め戻された土中に土器が包含されていたと捉えられるものである。それらの住居跡からは、ほとんどが大木8b式の新しい段階と大木9式の古い段階に比定される土器が出土している。

この傾向は、第1～4次調査も同様の傾向で捉えられ、また両者が共伴関係を示した（註2）住居跡も相当数見られる。勿論、その出土状態や出土層位の問題を無視して言及するのは安易な判断になりかねないが、該期の土器編年における問題を提起する資料である可能性も否定できないと思われる。ただ、残念なことに第5次調査の資料では、該期住居跡同士で重複関係を明瞭に示すものがなく、またその出土状態は時間尺となり得るような廃棄ではない（註3）。ただし、従来から多くの研究者が取り上げながらも、明確な結論が出されていないと思われる大木8b式と大木9式の中間的な位置付けの土器が、沢田I遺跡からは出土を見ている現状は無視できないと判断される。

沢田I遺跡で検出された50棟に及ぶ中期住居跡は、上述したような大木8b式と大木9式の中間的な土器の位置付けが可能であれば、それに炉の形態や住居跡同士の重複関係を加味させ、最低でも4時期以上の集落の変遷を示すことは可能ではないかと捉えている。そして、上述のような内容が示せれば、一時期の集落が何棟程で構成されているのかを解明する手掛かりと該期に見られる複式炉の出現期などの推測資料にもなり得る可能性があろう。

（3）沢田I遺跡出土の大木8b式と大木9式について

本項では、上述したような沢田I遺跡における中期の変遷を辿る足掛かりを示せばと思う。時間の都合もあり、今回は概ねの時間尺を示すことを目的に、出土した土器に着眼することとし、遺構の重複関係、住居跡の平面形・炉形態といった内容は今後の課題としておきたい。

先に大木8b式について、県内における大木8b式の研究としては、「柿の木平遺跡」（盛岡市）発掘調査報告書中に掲載された3細分案（1982高橋他）が有名である。その中で、大木8b式の最も新しい段階に比定されるのが、大木8b-3式とした土器群である。本項は、後続する大木9式との橋渡しとなる大木8b-3式を一つの指標として若干の分析を試みる。

本遺跡の基準資料としては、m98住居跡1号、o98住居跡1号、r99住居跡1号出土土器を中心に第5次調査分の大木8b式と大木9式について集成を行った（第59・60図）。ただし、完形個体がなく、また全体の器形を知り得る資料も非常に希少であるため、器形や文様帶の傾向を探る資料とは言い難い。よって、文様や諸特徴から分類を行い、大木8b式をA～Eに、大木9式をa～iに区分した。

＜大木8b式＞

- A類 口縁部に隆沈線による渦巻文が施文され、横若しくは縦方向に隆帶が連結される。
- B類 頸部に横位沈線が引かることで、口縁部と胴部が分離する。口縁部は無文帶となり、胴部は頸部の横位沈線に連結した文様がモチーフされる。
- C類 口縁部に渦巻文が施文され、文様は沈線によりモチーフされる。A・B類の両者の要素が同化して見られる。
- D類 口縁部に渦巻文の施文が見られることでは、A類と同様の特徴を有するが、頸部に無文帶を持つことで、口縁部文様帶と胴部文様帶が独立性を持つ。
- E類 小形の渦巻文が複数施文される。

＜大木9式＞

- a類 隆・沈線及び磨消繩文による懸垂文的区画が見られる。97は頂下に渦巻文の施文が見られる。
- b類 磨消繩文→沈線により方形的な区画が見られる。
- c類 区画文の間（磨消繩文部分）に沈線による蕨手状文（渦巻文的文様）がモチーフされる。平縁と波

状口縁がある。

- d 類 底部～口縁部にかけて外傾気味に立ち上がる。口縁部に円文、胴部上半～下半に規則性の弱い（窺えない）逆U字状文が施文される。
- e 類 口縁部が、外反して立ち上がる器形で、楕円形文（沈線文）と推定される区画文が施文される。
- f 類 頸部がやや括れ、口縁部が内湾して立ち上がる器形である。口縁部の楕円形文（沈線文）同士の間付近から、逆U字状文（沈線文）が垂下され、横方向に繰り返し施文される。
- g 類 胴部中位に膨らみを持ち、頸部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形を呈する。口縁部～胴部下半にかけて逆U字状文（沈線）が連続して施文される。
- h 類 口縁部の楕円形文と胴部中位～下位に垂下する逆U字状文が上下でセットとなり、その両側に口縁～胴部下半まで逆U字状文（沈線）が施文され、横方向にそれが繰り返される。器形的には、バリエーションが豊富な様相である。
- i 類 口縁部が内湾する器形で、g 類としたものに比べて、幅広めの逆U字状文（沈線）が連続して施文される。

全般に第5次調査出土の大木8b式の資料は、大木8b-3式に比定される新しい段階の土器と捉えられる。大木9式については、上述の9分類した中で、a～d・i類は従来の大木9式の編年観から見て、古い段階に比定される可能性が高いと思われる。

次ぎに沢田I遺跡第1～4次調査資料を取り挙げてみる。

該期の住居跡は42棟検出している。全般に言えることは、出土土器が少なく、完形個体は希少と言える。また、大木8b式においては大木8b-3式に比定される新しい段階のものが多く、大木9式においては古い様相と捉えられるものが多いことから、第5次調査資料と共に通する傾向で捉えられる。

今回は、全ての住居跡を検討するのは時間的にむりであるため、多少恣意的では有るが、大木8b式主体、大木9式主体、両者が共伴関係（註4）にあると捉えられる住居跡の3種に着眼し抽出してみた。

＜大木8b式主体資料＞ RA164・RA205住居跡が挙げられる。RA164は、埋甕が検出された住居跡で、A・B・E類の土器が出土している。RA205は、大木8b式の中でも新・古の混在が窺え、A類は散見されるが他類は見られない。

追記として、RA164は出土土器的に見れば大木8b式の範疇で捉えられるものであるが、住居の平面形や炉の位置、炉石の配列などは、他とは相違する特徴を持つ住居跡である。現段階では推測の域を越えないが、複式炉との移行期的な時期である可能性が考えられる。

＜大木8b式・大木9式共伴資料＞ RA120・143・150・169住居跡は、大木8b式と大木9式が共伴関係を示す例と捉えた。

RA120・RA143住居跡出土の中には、第5次調査資料に見られない文様モチーフや特徴を有する土器が存在する。また土器だけで見れば、共伴性ではなく、時期的な混在が多い可能性で捉えるべき資料かもしれない。RA150は、A・D・E類とb・e類が共伴して見られる。RA169は、A・C・E類とh類が共伴する資料であるが、大木8a式と思われるものも含まれているなどの状況から、共伴性と言うよりは時期の混在した土器群である可能性が高い。細部を検討すると、本項の趣旨に反した資料である可能性が高いが、今回は遺構の属性を加味していないので、今後に検討する必要は残ると思われる。

＜大木9式主体資料＞ RA109・RA144を取り挙げた。RA109は、口縁部付近に小形の渦巻文が残り、

沈線によるモチーフが描かれ、磨消縄文が見られる。器形は大木 8 b 式的ではなく、大木 9 式の範疇で捉えられる土器であろう。この資料は、まさに大木 8 b 式と大木 9 式の中間的な特徴を有している土器ではないかと思われる。R A144出土土器は、文様は g 類に類似する土器群が主体であるが、内湾した後わずかに外反する口縁部の形態に特徴が窺える土器群である。

全般的な傾向をまとめると、第 5 次調査資料とは微妙に異質な要素が散見される土器が多いように思われる。沢田 I 遺跡の中においても、大木 9 式とする土器のバリエーションは非常に豊富なのであろうか。若しくは、若干の時期差が存在するのであろうか。

近年当センターで調査した該期事例としては、「山王山遺跡」(盛岡市)が挙げられる。報告書を散見する限り、中期においては限りなく大木 8 b 式と言う一型式の時間で捉えられる集落跡で、特にも隆盛を迎えるのが大木 8 b - 3 式に相当する新しい段階である。それに後続する時期である可能性が窺える資料としては、「上村貝塚」(宮古市)が挙げられる。同遺跡資料の中で着目したいのが、A - 5 号住居跡である。同住居跡は大木 8 b 式の新しい段階や大木 9 式の古い段階の土器が多量に廃棄された住居跡である。先の分類で c 類とした蕨手状文を伴う土器が、相当数散見できるなど大木 8 b 式と大木 9 式のトラン斯基ーを握る資料である可能性が高い。ただし、層位毎に出土土器を検討してみた結果としては、廃棄単位には多少の混在が考えられ、上下関係を明示する資料とは思われなかった。ただし、型式学的には問題を提起する資料であろう。大木 9 式について、当センターの事例の中で大木 9 式による短時期に近いか若しくは大木 9 式期主体の集落遺跡は、非常に希少であるあることを再認識した。「上米内遺跡」(盛岡市)、「館 IV 遺跡」(北上市)、「繫 III 遺跡」(盛岡市)などのように、大木 8 b 式か大木 10 式と複合する遺跡が多く、また両者の隆盛に挟まれ、大木 9 式期としてはやや希薄な場合が多い。その中で、大木 9 式による短時期とは言えないまでも、大木 9 式期を主体とする数少ない事例として、「倍田遺跡 IV」(岩手町)を挙げておきたい。同遺跡は、大木 8 a ~ 大木 10 式期の住居跡が 28 棟以上(註 5)検出されている。また、報告書が発刊されていないため詳細な内容は言及できないが、同じ岩手町に所在する「秋浦 I 遺跡」についても該期主体の集落と言える。時間の関係もあり、密に検索を行えていないため、推測の域を越えない内容ではあるが、岩手県南部や沿岸地域に良好と思われる資料が少ない現状を考えると、北緯 40° 線周辺地域に着眼してみるのも一考であるかもしれない。

結語として、今回取り挙げた中期中葉～後葉の分析は、自身が期待していたような結論は導けなかった。ただ、大木 9 式の分類に際して、c 類とした蕨手状の沈線を伴う土器は、該期土器を研究するに際して、キーを握る可能性がある土器でないかと推定される。沢田 I 遺跡の集落変遷については、今後何れかの機会に、住居跡同士の切り合い関係や平面形態、炉形態などの要素からアプローチを試みたい事象と思っている。

課題ばかりを残した総括に終わってしまったが、2 年間沢田 I 遺跡の発掘調査に参加できたことは、非常に有意義なことばかりであったと思っている。今後も山田町の発掘調査には関心を示して行きたい。

最後に、今回行った第 5 次調査は、調査終了間際の 2 週間雨続きに見舞われたが、その悪環境にも関わらず地元の作業員さん 17 名には御尽力いただいた。また、室内整理の作業員さんにも、整理最終日の定刻ぎりぎりまで図版作成に従事いただいた。文末ながら記して心から感謝申し上げる。(星・前田)

<註>

(註 1) 第 V 章で記述したとおり、調査方法や調査員の土の観察眼に起因して発見できなかった可能性も否定できない。それについては、早期末葉～前期初頭についても同様である。調査の反省も兼ねて記述しておくと、沢田 I 遺跡の全般的な傾向としては、上位層で検出される古代、弥生時代の住居跡は、黒色～黒褐

色土中で検出される場合が多く、縄文時代中期は褐色土中で検出される場合が多い。問題は前期の住居跡である。埋土中に中揮火山灰が混入されるものは、比較的肉眼でプラン把握は可能である場合が多いものの、同火山灰の混入のない住居跡は黄褐色土中で黄褐色土によるプラン検出である場合があり、検出が非常に困難であった。その傾向は柱穴や壁溝にも言えることで、推定していた以上に地山土を使用した整地が行われている可能性が考えられる。よって、前期の住居跡の精査が難しいため、それより古い早期の住居跡は本当にはないのか本当はあるのか試行錯誤を繰り返しつつも、結果としては不明と言う結果で終わってしまった。調査担当者の星の力量不足によるところも大きく、今回は明確な結果を提示できないが、今後の沢田Ⅰ遺跡を始め同地域周辺の該期遺跡の発掘調査の機会には、上述のような問題点も視野において調査を期待するものである。

(註 2) 報告された資料で捉えれば共伴関係が窺える出土状態を示した住居跡は多い。大木 8 b - 3 式に後続する資料が含まれている可能性も考えられるので、あえて言及しておきたい。

(註 3) r 99住居跡出土の土器の接合状況は、床面直上出土と埋土上位出土が接合する場合が顕著に確認されるなど、下層出土と上層出土に時間差は把握できない。

(註 4) 大木 8 b 式と大木 9 式が共伴関係を示した住居跡は、比較的多く散見される。ただし、全般に浅い竪穴住居や古代の住居跡に破壊を受けているものが多く、層位的に良好と判断される資料は少ない。

(註 5) 縄文時代の住居跡は37棟検出されているが、報告書中で筆者は中期中葉4棟、中期後葉12棟、中期であるが詳細不明9棟、時期不明が9棟と述べられている。

＜参考引用文献＞

- 浅田知世（1993年）『蟹沢館遺跡発掘調査概報』北上市埋蔵文化財調査報告書14集
高橋憲太郎他（1989年）『トロノ木Ⅰ第1次～第7次』発掘調査報告書宮古市埋蔵文化財調査報告書17集
高橋憲太郎他（1982年）『柿ノ木平遺跡発掘調査報告書』盛岡市文化財調査報告書23集
小田野哲憲（1990年）『上村貝塚発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター第158集
佐々木清文（1997年）『沢田Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター第268集
佐々木清文・千葉正彦（2000年）『沢田Ⅰ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター第318集
神敏明（1994年）『倍田IV遺跡発掘調査報告書』岩手県埋蔵文化財センター第207集